

金沢大学 古代文明・文化資源学研究所

要覧 2025

Kanazawa University

Institute for the Study of Ancient Civilizations and Cultural Resources

Bulletin 2025



目次

ご挨拶.....	3
概要.....	4
運営組織.....	5
研究組織.....	5
専任・兼任教員の研究概要.....	7
外部研究資金採択情報.....	17
諸規定.....	19



ご挨拶

金沢大学古代文明・文化資源学研究所は、本学では初となる人間社会研究域を母体とする研究所として令和4年4月1日に設立されました。特定の地域に偏らず、世界各地の古代文明を対象に現地フィールドワークを中心に調査研究を行い、そこに自然科学的な分析手法を積極的に取り入れ、文理医融合型の先端的考古学研究をリードする世界的研究拠点を形成することを目標に掲げています。

本研究所は3つの部門から構成されます。まず、世界各地の遺跡での発掘調査や出土品調査を行う研究者が中心となる「考古学部門」、次に、自然科学的なアプローチで遺跡や遺物の調査分析を進める「考古科学部門」、そして、古代文明遺跡などの文化遺産を新たな価値の源泉ととらえなおし、文化資源活用の観点から研究を進める「文化資源学部門」です。

もちろん、この3部門は排他的な関係にあるわけではありません。実際には、個々の研究者は、従来のオーソドックスな考古学研究や発掘調査だけでなく、生化学や同位体地球化学などのアプローチを援用し、さらには、対象とする遺跡の保存・修復や活用にも取り組むといったように、3つの部門を跨ぐように研究を進めています。

本研究所には専任教員、特任教員に加え、数多くの客員教員や客員研究員が在籍しています。そのフィールドは、中国、西アジア、エジプト、中米など世界中に広がっており、各地の考古学研究の最前線で大規模な国際共同研究を展開しています。コロナ禍で停滞していた海外調査もほぼ旧に復し、次々に重要な研究成果が得られつつあります。

世界各地の調査で発見された遺構や遺物は、研究者のみならず、人類共有の貴重な文化資源として保存・活用されなければなりません。こうした社会的要請を受け、本研究所のメンバーは、遺跡整備や博物館建設などの取り組みにも積極的に参画し、我が国の国際貢献の一翼を担っています。

言うまでもなく、調査・研究によって得られた学問的成果は学界の中だけに留めておくべきものではありません。本研究所では国際シンポジウムなどのイベントを国内あるいは海外で随時開催するだけでなく、研究所独自の英文モノグラフやジャーナルの刊行を通じて海外発信に努めました。また、次世代の研究者を育成すべく、国内外で若手向けセミナーなどを継続的に開催しています。こうした一連の活動を通じて、名実ともに世界トップレベルと認知される拠点の形成を目指します。皆さんには引き続き宜しくご指導、ご支援賜りますようお願い申し上げます。

金沢大学

古代文明・文化資源学研究所 所長

中村 慎一



概要

【古代文明・文化資源学研究所設置の背景】

本学の強みである古代文明における考古学及び文化資源学の分野において、従来の「人文・社会系の考古学」というコンセプトから脱却した、文理融合型の新たな「次世代考古学」を確立するため、人間社会研究域の附属センターであった古代文明・文化資源学研究センターを発展的に解消し、令和4年4月1日に全学研究所として、「古代文明・文化資源学研究所」を設置いたしました。

【古代文明・文化資源学研究所の目標】

- (1) 本学の強みである考古学・文化資源学の分野に革新的なパレオゲノミクスを融合させて格段の進化を図り、文理融合の新たな古代文明研究スタイルをもつ世界トップレベルの研究拠点形成を目指します。
- (2) 世界的な文化遺産の調査研究や保護・保全に関して、世界を俯瞰するネットワーク構築を行い、我が国を代表する研究機関として日本の国際貢献に寄与しSDGs達成に貢献する研究所を目指します。

【古代文明・文化資源学研究所の具体的な研究活動計画】

- (1) 上記目標の達成のため、優秀な人材の獲得・育成を続ける計画です。
- (2) 上記目標の達成のため、海外の著名な研究大学や世界的研究者との国際共同研究をこれまで以上に推進し、若手研究者を中心とした頭脳循環プログラムを創成していく計画です。
- (3) 上記目標の達成のため、大型科研費（大型外部資金）の複数獲得に向けて研究所として取り組んでいくとともに、研究所に属する研究者が切磋琢磨し、インパクトファクターの高い国際雑誌に論文を掲載していきます。
- (4) 上記目標の達成のため、研究所に属する研究者は、様々なプログラムを通して、常にその研究成果を社会に発信し還元していきます。



運営組織

研究所長 中村 慎一

副研究所長 足立 拓朗

研究所アドバイザー

關 雄二 国立民族学博物館名誉教授

常木 晃 筑波大学名誉教授

研究組織 2025年9月1日現在

考古学部門

部門長 小高 敬寛

研究所長 中村 慎一（理事（研究・社会共創・大学院支援担当）／副学長）

兼任教員 小高 敬寛（国際基幹教育院准教授）

古畠 徹（人間社会研究域国際学系特任教授）

松永 篤知（資料館特任助教）

客員教授 上杉 彰紀（鶴見大学文学部文化財学科教授）

小嶋 芳孝（金沢学院大学名誉教授）

小柳 美樹（古代文明・文化資源学研究所客員教授）

秦 小麗（復旦大学科技考古研究院教授）

藤井 純夫（古代文明・文化資源学研究所客員教授）

客員研究員 Garcia Fernandez, Maria Gudelia（香川大学講師）

久米 正吾（東京大学総合研究博物館学術専門職員）

深山 絵実梨（早稲田大学非常勤講師）

山藤 正敏（奈良文化財研究所都城発掘調査部主任研究員）

和田 浩一郎（国際文化財株式会社／NPO法人文化遺産の世界）



考古科学部門

部門長 覚張 隆史

- 専任教員 覚張 隆史 (古代文明・文化資源学研究所 准教授)
佐々木 由香 (古代文明・文化資源学研究所 特任准教授)
- 兼任教員 佐々木 陽平 (医薬保健研究域薬学系 教授)
西内 巧 (疾患モデル総合研究センター／研究基盤支援施設 准教授)
石谷 孔司 (医薬保健研究域附属サピエンス進化医学研究センター 助教)
水野 哲志 (医薬保健研究域・医学系 助教)
Ravdandorj Odongoo (医薬保健研究域附属サピエンス進化医学研究センター 特任助教)
- 客員教授 飯塚 義之 (中央研究院地球科学研究所 研究技師／
岡山大学文明動態学研究所 客員研究員)
内山 純蔵 (イーストアングリア大学セインズベリー日本藝術研究所 研究員)
菊地 大樹 (中国蘭州大学考古学及博物館学研究所 教授)
小林 正史 (北陸学院大学 名誉教授)
藤田 尚 ((株) パレオ・ラボ 顧問／同志社大学研究開発推進機構 研究員)
- 客員准教授 阿部 善也 (東京電機大学 助教)
中込 滋樹 (ダブリン大学トリニティカレッジ 助教)
- 客員研究員 板橋 悠 (筑波大学人文社会系 准教授)
北川 千織 (ポーランド科学アカデミー 助教)
黒住 耐二 (ウルマ自然史研究所 代表)
村串 まどか (明治大学理工学部 助教)

文化資源学部門

部門長 足立 拓朗

- 専任教員 足立 拓朗 (古代文明・文化資源学研究所 教授)
上田 長生 (人間社会研究域人文学系 教授)
川澄 厚志 (融合研究域・融合科学系 准教授)
豊島 祐樹 (融合研究域・融合科学系 講師)
- 客員教授 山形 真理子 (立教大学 特任教授)
客員研究員 伊藤 雅文 (石川考古学研究会 副会長)
小川 雅洋 (公立小松大学 特任助教)
河村 好光 (石川考古学研究会 会長)
黒崎 充 (ベラクルス州立大学言語学部外国語学科言語センター・ハラバ校
日本語統括部長)
五木田 まきは (東京藝術大学大学美術館 学芸研究員)
吉手川 博一 (ホンジュラス国立自治大学社会科学部人類学科 専任講師)
田尾 誠敏 (大東文化大学歴史文化学科 非常勤講師)



専任・兼任教員の研究概要

【考古学部門】

中村 慎一（なかむら しんいち）

（所属：理事（研究・社会共創・大学院支援担当）／副学長）

＜研究内容＞

専門は中国考古学ですが、伝統的な遺物研究にとらわれず、比較考古学的手法と学際研究とを旨とし、限られた現地調査の機会から最大限の情報を引き出すよう努力してきました。

比較考古学的研究を代表するのはアジア稻作起源論です。アジア全体を視野に入れ、稻資料出現の時間的傾斜から、中国長江流域起源説を導き出しました。また、環濠・囲壁集落の研究においては、東アジアの事例を世界の他地域と比較することで、中国のみならず、日本の弥生文化研究などに対しても提言を行ってきました。

学際研究として特筆すべきは浙江省の田螺山遺跡と良渚遺跡群を中心に実施した日中共同研究です。参加研究者が40名にもなる世界的にも類を見ない大規模なもので、同位体地球化学、分析化学、生化学、パレオゲノミクスなど多彩な領域をカバーする研究チームを組成し、古環境や自然資源利用について数多くの研究成果を挙げることができました。

近年精力的に取り組んでいるが中国文明起源論です。紀元前3千年紀後半の中国には既にいくつもの地方文明が誕生していましたが、紀元前2千年紀の初頭、それらは相次いで崩壊します。その際、それまで文明の空白地帯であった「中原」の地に、各地方文明の要素が吸い寄せられ、あたかも「雜種強勢」とでも言うべき勢いを得て周辺へと拡散していきます。それこそが「中国文明」であると私は考えています。

＜主な著書・論文＞

- 中村慎一ほか（編）2025『空間と環境の古代東アジア世界史：GISと歴史学・考古学の協奏』勉誠社
中村慎一（編）2024『動物・植物・鉱物から探る古代中国』六一書房
中村慎一（監修）2024『中国文明起源の考古学』雄山閣
中村慎一（監修）2024『東アジア考古科学の新展開』雄山閣
中村慎一（編）2023『中国新石器時代文明の探求』六一書房
中村慎一（編）2022『中国江南の考古学』中国文明起源プロジェクト
中村慎一・劉斌（編）2020『河姆渡と良渚：中国稻作文明の起源』雄山閣



小高 敬寛（おだかいたかひろ）

（所属：国際基幹教育院 准教授、専門：西アジア考古学）

＜研究内容＞

1996年よりシリアでのフィールドワークを通じて西アジアの先史考古学に携わり、近年はトルコ、アゼルバイジャン、ヨルダン、イラン、サウジアラビアでの遺跡調査にも参加してきました。そして、現在はイラク・クルディスタンを中心に活動しています。これらの国ぐにの領土を含む西アジアが果たしてきた人類史上の先駆的役割は広く知られていますが、特に研究の標的としているのは、農耕牧畜社会の成立から都市文明社会に至るまでの文化変化のプロセス、そしてその波及によって生み出された古代オリエントともいべき歴史的世界の成り立ちの解明です。

具体的には、土器資料の研究を基盤に、生態環境や生業経済、ヒトの移動性との関連を注視しながら、物質文化の時空間的枠組みについて精細かつ重層的に把握することを進めています。その方策として、関連諸分野を専門とする研究者たちの協力を得て「ザグロス山麓先史考古学プロジェクト」を主宰し、イラク・クルディスタン南東部、シャフリゾール平原に所在するシャカル・テペ遺跡およびシャイフ・マリフ遺跡の調査を行なうとともに、国内外に所蔵されているイラク北部の諸遺跡から出土した考古資料の分析にも取り組んでいます。

こうした活動を通じて、人類最古の文明であるメソポタミア文明がおよそ5000年前に誕生した経緯を実証的に跡づけ、世界各地の古代文明を比較研究するうえでの基軸を提供できればと考えています。

＜主な著書・論文＞

- Odaka, T. 2024. Tell Begum, Shaikh Marif and Shakar Tepe: The Late Neolithic Pottery in the Shahrizor Plain, Iraqi Kurdistan. In T. Richter and H. Darabi (eds.), *The Epipalaeolithic and Neolithic in the Eastern Fertile Crescent: Revisiting the Hilly Flanks*, pp. 261-278. Abingdon and New York, Routledge.
- Odaka, T. 2023. Clay Containers and Mobility in the Final Stage of Neolithisation: Storage Bins and the Earliest Pottery at Tell el-Kerkh, Northwest Syria. In O. P. Nieuwenhuyse, R. Bernbeck and K. Berghuijs (eds.), *Containers of Change: Ancient Container Technologies from Eastern to Western Asia*, pp. 223-237. Leiden, Sidestone Press.
- Odaka, T., O. Maeda, K. Shimogama, Y. S. Hayakawa, Y. Nishiaki, N. A. Mohammed and K. Rasheed 2023. Late Prehistoric Investigations at Shakar Tepe, the Shahrizor Plain, Iraqi Kurdistan: Preliminary Results of the First Season (2019). In N. Marchetti et al. (eds.), *Proceedings of the 12th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East, vol. 2: Field Reports, Islamic Archaeology*, pp. 415-428. Wiesbaden, Harrassowitz.
- Odaka, T., O. Maeda, T. Miki, Y. S. Hayakawa, P. Yewer and H. Hama Gharib 2023. Excavations at Shaikh Marif, Iraqi Kurdistan: Preliminary Report of the First Season (2022). *Ancient Civilizations and Cultural Resources* 1: 1-22.
- Odaka, T. and O. Nieuwenhuyse 2022. Halaf Pottery in the East End: Insights from Tell Begum, Iraqi Kurdistan. *Orient* 57: 113-124.
- Odaka, T. 2021. Neolithic Potsherds from Tell Hassuna: The Collection of the University Museum, the University of Tokyo. In R. Özbal, M. Erdalkiran and Y. Tonoike (eds.), *Neolithic Pottery from the Near East: Production, Distribution and Use*, pp. 169-179. Istanbul, Koç University Press.



古畑 徹（ふるはた とおる）

（所属：人間社会研究域国際学系 特任教授、専門：前近代東北アジア史、東アジア国際交流史）

＜研究内容＞

私の専門は考古学ではなく、文献史学です。その私がこの研究所の兼任教員となっているのは、現在、メインの研究テーマとして取り組んでいるのが渤海国（698～926）だからです。

渤海国は、領域が現在の中国・朝鮮（韓国・北朝鮮）・ロシアの国境を跨ぎ、かつ居住諸種族もそれらの構成民族の源流の一部となっているため、関連国家間、とりわけ中国と韓国・北朝鮮の間で激しい「歴史の争奪」の対象となっています。これを「歴史論争」ともいいますが、私の問題意識は、そうした渤海国をめぐる「歴史論争」をいかに克服するか、にあります。

ただ、渤海国についての文献史料は極めて乏しく、考古学の成果なしには研究を進められません。そのため私は、ここ10数年来、考古学の研究者と文献史学の研究者がチームを組んで渤海史の解明に取り組むプロジェクトを組織してきました。現在進めている基盤研究(A)「高句麗・渤海史像の再構築についての総合的研究」も、中国・韓国の研究者との交流を深めながら、複数の広域史のなかで多元的に渤海国を描き出すことで、「歴史論争」の克服を試みようとするものです。

極めてマイナーな渤海史ではありますが、考古学・文献史学融合の最前線として、多くの皆様に注目していただければ幸いです。

＜主な著書・論文＞

古畑徹（著）・クオン ヨンチョル（訳） 2025 『발해국이란 무엇인가（渤海国とは何か）』ソウル、民俗苑。

古畑徹 2024 「발해승 정소의 여행: 『입당구법순례행기』의 「곡일본국내공봉대덕령선화상시병서」를 소제로 (渤海僧貞素の旅—『入唐求法巡礼行記』の「哭日本國內供奉大德靈仙和尚詩并序」より—)」鄭淳一（編）『승려와 불교의 동아시아 해역 교류 (僧侶と仏教の東アジア海域交流)』ソウル、景仁文化社、211-248頁。

古畑徹 2024 「渤海国の高氏について—渤海国の対外政策と関連させて—」中野高行・柿沼亮介編『古代の渤海と日本』東京、高志書院、51-74頁。

古畑徹 2024 「渤海史上における「安史の乱」の評価について」『唐代史研究』27、79-114頁。

古畑徹（編） 2022 『高句麗・渤海史の射程—古代東北アジア史研究の新動向—』。東京、汲古書院。

古畑徹 2021 『渤海国と東アジア』。東京、汲古書院。

鹿島正裕・倉田徹・古畑徹（編） 2020 『国際学への扉——異文化との共生に向けて〔三訂版〕』。東京、風行社。

古畑徹 2016 『渤海国とは何か』東京、吉川弘文館。



松永 篤知（まつなが あつし）

（所属：金沢大学資料館 特任助教、専門：日本考古学、博物館学）

＜研究内容＞

金沢大学の学部生の頃から25年以上、縄文時代・中国新石器時代を中心とする編物と敷物圧痕の研究を続けています。

編物とは、細長い素材を組んだり絡めたり巻き上げたりして平面的ないし立体的に形成した器物のこととで、カゴや敷物、編布（あんぎん）などのことです。一見すると地味ですが、過去の時代においては衣食住その他、生活のあらゆる場面で活躍した重要な道具であり、当時の人々の暮らしを復元する上では欠かせません。

敷物圧痕は、土器製作時に敷かれていた編物や植物の葉などが土器底面に押圧されて残った凹凸のことですが、遺存しにくい編物や植物の間接資料であり、土器製作・編織技術・植生古環境の貴重な手がかりとして、卒業論文・修士論文の頃から注目し続けています。

近年は、織物や編織具にも研究対象を広げ、三次元計測や民俗／民族調査なども取り入れながら、より実態に即した東アジア先史時代の編織技術・編織文化の解明を目指しています。

また、時代を問わず北陸・東海地方の約30遺跡の発掘調査に従事しており、金沢大学においても構内遺跡の発掘調査を担当しています。宝町遺跡では、近世城下町や近代病院の遺構・遺物を発見しました。

北陸地方出身者であり、金沢大学資料館を主所属としていることから、これらの調査・研究の成果を北陸の地元の方々に展示等で発信しながら、地域に根差した考古学を進めていきたいと思っています。

＜主な著書・論文＞

松永篤知 2025 「石川県域における「編む」から「織る」への編織技術革新」 『学究無限 吉岡康暢先生 卒寿記念論集』、71-80頁。金沢、吉岡康暢先生卒寿記念論集刊行会。

松永篤知 2024 「石川県かほく市余地経塚出土の珠洲焼について」 『金沢大学資料館紀要』19号、29-38頁。

松永篤知 2023 「石川デジタルミュージアムネットワークの取り組み」 『博物館DXと地域文化遺産シンポジウム石川2023 資料集』、31-35頁。金沢、金沢大学資料館。

Matsusnaga, A. 2023. Modernization Heritage and Modern Archaeological Sites in Kanazawa University. In Kanazawa University Museum (ed.), 2022 *Kanazawa Symposium on Modernization Heritage Research Report* (「金沢大学の近代化遺産と近代遺跡」金沢大学資料館編『近代化遺産シンポジウム金沢2022研究報告書』), pp. 29-42. Kanazawa, Kanazawa University Museum.

松永篤知 2021 『金沢大学と石川県の考古学—北陸人類学会から現在までの歩み—』金沢、金沢大学資料館・金沢大学埋蔵文化財調査センター・石川考古学研究会。

松永篤知（編著） 2021 『金沢大学構内遺跡 宝町遺跡—宝町遺跡第19次発掘調査報告書—』金沢、金沢大学埋蔵文化財調査センター。

松永篤知 2020 「河姆渡の編物、良渚の編物—長江下流域の編物の系譜を探る—」 中村慎一・劉斌（編）『河姆渡と良渚』、161-168頁。

松永篤知 2019 「中国先史時代の編物について」 『中国考古学』19号、91-108頁。



【考古科学部門】

佐々木 陽平（ささき ようへい）

（所属：金沢大学医薬保健県研究域薬学系 教授、専門：比較民族薬物学、生薬資源学）

＜研究内容＞

各古代文明ではそれぞれ特徴がある医療が行われており、地域特有の医学体系として現在に伝わっています。これら理論体系が確立した医学を伝統医学と称しており、使用する薬物は天然に由来する生薬を原料にしているという共通点があります。生薬はその地域で収穫できるものや、交易で他国から輸入しているもの、などがあります。このように各伝統医学は相互に関係を保ちながら発展しています。現在、使用する生薬のDNA解析による近縁関係の解明、成分分析による有効成分の解明を実施することで、同じ植物を異なる疾患に使用していたり、異なる疾患に別の植物を使用していたりという比較が可能になります。このように伝統的な知識を基に新たな医薬品開発につなげたいと考えています。

＜主な著書・論文＞

- A. Intharuksa, N. Prasertwitayakij, S. Yanaso, A. Phrutivorapongkul, W. Charoensup, K. Thongkhao, Y. Sasaki, and W. Wongcharoen, Uncovering the poisonous aconitine containing plants in homemade herbal liquor using a convergent approach. *Scientific Reports*, 15, 31286 (2025).
- S. Sasaki, S. Yokota, Y. Sasaki, Optimizing Post-Harvest Processing Conditions for Angelica acutiloba Roots in Hokkaido: Storage Temperature and Duration, *Journal of Natural Medicines*, 79, 328-340 (2025).
- Y. Kudo, H. Ando, A. Kaneda, H. Ito, K. Umemoto, S.R. Ni, M. Mikage, and Y. Sasaki, Evaluation of rooting characteristics of Ephedra cuttings by anatomy and promising strain selection based on rooting characteristics and alkaloid content, *Journal of Natural Medicines*, 77, 327-342 (2023).
- Y. Kudo, K. Umemoto, T. Obata, A. Kaneda, S.R. Ni, M. Mikage, Y. Sasaki, H. Ando, Seasonal variation of alkaloids and polyphenol in Ephedra sinica cultivated in Japan and controlling factors, *Journal of Natural Medicines*, 77, 137-151 (2023).
- Y. Sasaki, K. Komatsu, S. Hayashi, E. Kodaira, S. Wei, N. Kawano, K. Yoshimatsu, Toward the sustainable use of Kampo medicines “1st International Symposium on Kampo Medicine”, *Trad. & Kampo Med.*, 9, 128-129 (2022).



Ephedra属植物の分布域調査 1
(ウズベキスタン)



Ephedra属植物の分布域調査 2
(ウズベキスタン)



覚張 隆史（がくはり たかし）

（所属：古代文明・文化資源学研究所 准教授、専門：考古分子生物学、文化財科学、動物考古学、馬学）

＜研究内容＞

分子生物学および地球化学の分析手法を、遺跡出土人骨・動物骨に応用し、考古学・人類学研究を推進してきました。分子生物学研究において、日本列島の縄文人骨（伊川津貝塚）から世界で初めて全ゲノム配列を取得し、大陸集団との比較ゲノム解析によって縄文人の起源に関する新たな仮説を提示しました。また、縄文人・弥生人・古墳人・現代日本人の比較ゲノム解析によって、現代日本人の遺伝的特徴が古墳時代に大粹が形成されたこと、弥生時代の初頭に大陸から渡來した集団とは別に弥生時代終末から古墳時代初頭に「第3の集団」が渡來したことを実証し、「日本列島人の三重構造モデル」を世界で初めて国際学術誌上で公開しました。地球化学研究では、歯エナメル質のハイドロキシアパタイトに含まれるストロンチウム（Sr）や酸素など多種元素同位体比測定による哺乳動物の出生地推定や食性復元をこれまで実施してきました。特に、藤原京造営期において利用されていた家畜馬が東日本内陸部から持ち込まれたことを示し、大宝律令に記されていたとされる遠隔地の牧から朝廷へ献上する貢馬制度が大宝律令以前まで遡る可能性を示しました。この様に、生物遺体から最新の分析手法をいち早く応用し、これまで復元が不可能と考えられていた考古学・人類学における仮説の再評価を行ってきました。

＜主な著書・論文＞

Cooke, N., …, T. Gakuhari, S. Nakagome 2021. Ancient Genomics Reveals Tripartite Origins of Japanese Populations. *Science Advances* 7(38): eabh2419.

Gakuhari, T., S. Nakagome, …, H. Oota 2020. Ancient Jomon Genome Sequence Analysis Sheds Light on Migration Patterns of Early East Asian Populations. *Communications Biology* 3(1): 1-10

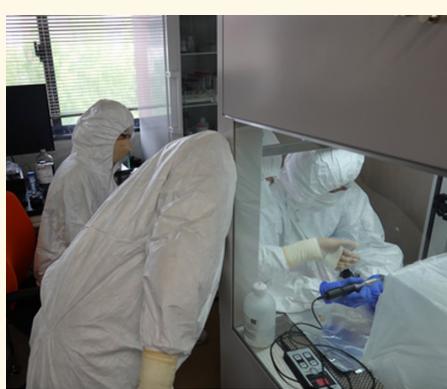
McColl, H., F. Racimo, L. Vinner, F. Demeter, T. Gakuhari, …, E. Willerslev 2018. The Prehistoric Peopling of Southeast Asia. *Science* 361(6397): 88-92.



古墳時代後期の古墳（石川県）



古墳時代の遺跡出土人骨



パレオゲノミクス専用の
クリーンルーム内における実験



西内 巧 (にしうち たくみ)

(所属：疾患モデル総合研究センター／研究基盤支援施設 准教授、専門：植物考古学、環境考古学)

＜研究内容＞

私たちは、植物と微生物の相互作用や環境ストレス応答における分子機構の解明をテーマに、プロテオミクスなどのオミクス技術を駆使して研究を進めています。また、こうした技術を活用し、近年では食に関連した研究や、考古試料を対象とする「パレオプロテオミクス」にも取り組んでいます。これは、縄文時代の人々がどのような食材を利用していたかを、最先端の科学で解き明かす新たなアプローチです。特に注目しているのが、遺跡から出土した土器に残る「付着炭化物」と呼ばれる調理の痕跡です。この中に含まれるタンパク質のアミノ酸配列を解析することで、当時調理されていた動植物の属や種を特定することが可能となっていました。さらに、正確な同定には多様な食材に対応したデータベースの整備が不可欠です。そこで、縄文人が利用していたとされるドングリなどの堅果類を中心に、植物タンパク質のデータベース構築にも取り組んでいます。これらの研究を通じて、縄文人の食文化や自然との関わりを科学的に再現することが期待されています。

＜主な著書・論文＞

- Nagano T, Watanabe C, Oyanagi E, Yano H, Nishiuchi T 2024. Wet-type grinder-treated okara modulates gut microbiota composition and attenuates obesity in high-fat-fed mice. *Food Res Inter* 182:114173.
- Sidiq Y, Tamaoki D, Nishiuchi T 2022 Proteomic Profiling of Plant and Pathogen interaction in Leaf Epidermis. *International Journal of Molecular Sciences* 23:12171.
- Bissaro B, Kodama S, Nishiuchi T, Díaz-Rovira AM, Hage H, Ribeaucourt D, Haon M, Grisel S, Simaan AJ, Beisson F, Forget SM, Brumer H, Rosso MN, Guallar V, O' Connell R, Lafond M, Kubo Y, Berrin JG 2022. Tandem metalloenzymes gate plant cell entry by pathogenic fungi. *Sci Adv* 8:eade9982.
- Asano T, Nguyen HT, Yasuda M, Sidiq Y, Nishimura K, Nakashita H, Nishiuchi T 2020. The *Arabidopsis* MAPKKK δ-1 is required for full immunity against bacterial and fungal infection. *J Exp Bot* 71:2085-2097.



石谷 孔司（いしや こうじ）

（所属：医薬保健研究域附属サピエンス進化医学研究センター 助教、専門：バイオインフォマティクス（生物情報科学）、ゲノム生物学、考古ゲノム学）

＜研究内容＞

遺跡などから出土した考古試料のDNAを分析する「パレオゲノミクス」は、過去に存在していた（あるいは絶滅してしまった）生物に関する貴重な情報を得るための強力なアプローチです。このような研究がここ数年で急速に進展した背景には、「バイオインフォマティクス」と呼ばれる、生物を情報科学的な視点から分析し理解するための研究分野の発展が深く関係しています。従来、考古試料のDNA分析には、経年劣化によるDNAの分解、他個体や別種のDNAによる汚染、非常に限られたDNA量といった多くの制約がありました。しかし、統計学や機械学習、深層学習、AIといった先端技術を駆使したバイオインフォマティクスの研究により、こうした課題が克服されつつあります。バイオインフォマティクスの研究開発を主軸にヒトを中心とした動植物や微生物の起源や進化に対する理解を深めながら、考古科学を含めた文理融合型研究を進めていきたいと考えています。

＜主な著書・論文＞

- Koji Ishiya, Fuzuki Mizuno, Jun Gojobori, Masahiko Kumagai, Yasuhiro Taniguchi, Osamu Kondo, Masami Matsushita, Takayuki Matsushita, Li Wang, Kunihiko Kurosaki, Shintaroh Ueda (2024). High-coverage genome sequencing of Yayoi and Jomon individuals shed light on prehistoric human population history in East Eurasia. *bioRxiv*.
- Koji Ishiya, Sachiyo Aburatani (2021). Multivariate statistical monitoring system for microbial population dynamics. *Physical biology* 19(1).
- Koji Ishiya, Fuzuki Mizuno, Li Wang, Shintaroh Ueda (2019). MitoIMP: A computational framework for imputation of missing data in low-coverage human mitochondrial genome. *Bioinformatics and Biology Insights*, 13, 1-9.
- Koji Ishiya, Shintaroh Ueda (2017). MitoSuite: a graphical tool for human mitochondrial genome profiling in massive parallel sequencing. *PeerJ*, 5.



水野 哲志（みずの てつし）

(所属：医薬保健研究域医学系 助教、専門：寄生虫の分子疫学調査・寄生虫、ウイルスのワクチン開発)

<研究内容>

マラリアや住血吸虫症などを引き起こす寄生虫は古来よりその存在が報告されており、ヒトを含む宿主とともに共進化をとげて今日の形になったと考えられる。私はこれまでに寄生虫を対象とした分子疫学調査をインドネシアやケニアなどの寄生虫蔓延地域で行い、ヒトを含めた脊椎動物の腸管に広く寄生する*Giardia intestinalis*の地理的分布とその進化学的背景についての知見を得てきた。特に*Giardia*などの腸管に寄生する寄生虫は、宿主の糞便内に大量の虫卵・囊子を排出することが知られており、考古学的資料から寄生虫遺伝子の検出が報告されている。またこれらの寄生虫の一部は、ヒトのみならず広く動物にも感染する人獣共通感染症の原因となる。考古学的資料に含まれるこれら寄生虫の遺伝子型の解析を行うことにより、寄生虫自体の進化学的背景の解明のみならず、ヒト-寄生虫あるいはヒト-動物の共生史の解明に向けての一助になることが期待される。

<主な著書・論文>

Mizuno T, Tokoroa M, Yagi T, Wada E, Yamadori I, Arai M 2024. Infant gastrointestinal canthariasis caused by cigarette beetle (*Lasioderma serricorne*). *Parasitol Int* 102921.

Tokoro M, Mizuno T, Bi X, Lacante SA, Jiang C, Makunja RN 2023. Molecular screening of *Entamoeba* spp. (*E. histolytica*, *E. dispar*, *E. coli*, and *E. hartmanni*) and *Giardia intestinalis* using PCR and sequencing. *MethodsX* 11:102361.

Mizuno T, Matey EJ, Bi X, Songok EM, Ichimura H, Tokoro M. Extremely diversified haplotypes observed among assemblage B population of *Giardia intestinalis* in Kenya 2020. *Parasitol Int* 75:102038.



佐々木 由香（ささき ゆか）

（所属：古代文明・文化資源学研究所 特任准教授、専門：植物考古学、環境考古学）

＜研究内容＞

人間は周囲の植物資源をどのように選択して利用し、また改変してきたのかという人間と植物の関係史を研究テーマとしています。森林資源に恵まれた日本列島では、縄文時代以降、森林資源から食料を得ていただけでなく、それらを利用して、構築物や、木製品、編組製品、漆製品などを製作してきました。さらに、約8000年前以降の居住空間の周りでは、資源をより利用しやすくするために人間が関与した植生を作っていたことが一部の地域では明らかになりつつあります。

こうした人と植物の関わり史を研究するためには、考古学的に遺構・遺物を検討して時空間的に位置付けるだけでなく、自然科学分析の成果を用いて植物遺体自体や周辺の自然環境を明らかにし、考古遺物の年代と一緒に議論する必要があります。そのために、主に種子・果実や葉などの大型植物遺体の分析や、樹種同定、レプリカ法による土器圧痕分析、土器付着炭化植物遺体の分析を自ら実践し、人間が資源として利用した植物遺体を検討してきました。また博物館や埋蔵文化財調査機関などと連携した共同研究で当時の技術知を解明するために、自然科学分析で明らかにした素材や植物の知識と、民俗調査で得られた知識を合わせて、実験や製品を復元する作業を行なっています。ニワトコなどの現生種実を用いた実験を通して過去の植物資源利用の新たな側面を見いだしたり、編みかごなどの製作を通じて遺物の観察だけではわからない技術の様相を発見したりしています。研究所では、所属されている様々な時代・地域の考古学研究者や自然科学研究者、地元の埋蔵文化財に携わる研究者と連携して、新たなフィールドも見つけていきたいと考えています。

＜主な著書・論文＞

Noshiro, S., Sasaki, Y., Yoshikawa, M., Kudo, Y., Bhandari, S. 2025. Survival through the 4.2 ka event by Jomon hunter-gatherers with adapted management and use of plant resources detected at the Denotame site in central Japan. *Vegetation History and Archaeobotany*, 34: 685-699.

佐々木由香 2024 「植物の利用からわかってきたこと」 阿部芳郎（編）『縄文時代を解き明かす』、112-144頁。東京、岩波書店。

佐々木由香 2022 「環境変化と植物利用—縄文弥生移行期の南関東地方—」 長友朋子他（編）『南関東の弥生文化 東アジアとの交流と農耕化』、93-109頁。東京、吉川弘文館。

Noshiro, S., Y. Sasaki and Y. Murakami 2021. Importance of *Quercus gilva* (イチイガシ) for the Prehistoric Periods in Western Japan. *Japanese Journal of Archaeology* 8(2): 133-156.

佐々木由香 2020 「植物資源利用からみた縄文文化の多様性」 『縄文文化と学際研究のいま』（季刊考古学別冊31）、69-84頁。



トチノキの採取と加工に関する民俗調査
(埼玉県小鹿野町)



編組製品の技法と素材植物の調査
(福島県南相馬市)



Ravdandorj Odongoo (らうだんどうるじおどんごー)

(所属：医薬保健研究域附属サピエンス進化医学研究センター 特任助教、専門：がん生物学、パレオゲノミクス、パレオエピゲノミクス)

＜研究内容＞

私は分子生物学者として、パレオゲノミクスおよびパレオエピゲノミクスの研究に取り組んでおり、古代モンゴル集団を対象としています。私の研究は、ゲノム解析とエピゲノム解析を統合し、古代人がどのように環境へ適応してきたかを解明することを目的としています。モンゴルの気候条件によって優れた状態で保存された古代人の遺骨は、人類の進化史、遺伝的多様性、環境適応を分子レベルで研究するための貴重な機会を提供します。高精度シーケンシング技術とDNAメチル化解析を用いて、遺伝的歴史、集団移動のパターン、集団構造の復元に取り組んでいます。遺伝的変異を特定するだけではなく、DNAメチル化パターンを解析することで、食生活、感染症や疾病といった周囲環境の要因が、人類の生物学にどのような影響を及ぼしたのかを探究しています。このアプローチにより、古代集団が環境の変化にどのように対応し、それが表現型の特徴、健康、疾患の感受性にどのような影響を与えたのかを包括的に理解することができます。環境適応に関連する遺伝的・エピジェネティックなパターンを特定することで、私の研究は人類の進化生物学や祖先の適応がもたらした長期的な影響の理解を深めることに貢献します。また、歴史的な意義にとどまらず、エピジェネティックな修飾が現代の集団の健康や生理機能にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにする手がかりとなる可能性があり、古代人と現代人のエピジェネティックデータを統合した研究にも取り組みはじめています。

＜主な著書・論文＞

- Odongoo R, Gunarta IK, Erdenebaatar P, Suzuki R, Horike MM, Horike ShI, Endo Y, Fuji T, Fukunaga R, Yoshioka K 2023. Overlapping role of c-Jun N-terminal kinase (JNK) 1 and 2 in imidazole ketone erastin-induced ferroptosis. *Gene Reports*. Elsevier 33(3):101813.
- Erdenebaatar P, Gunarta IK, Suzuki R, Odongoo R, Fujii T, Fukunaga R, Kanemaki MT, Yoshioka K 2023. Redundant roles of extra-cellular signal-regulated kinase (ERK) 1 and 2 in the G1-S transition and etoposide-induced G2/M checkpoint in HCT116 cells. *Drug Discovery and Therapeutics* 17(1):10-17.
- Gunarta IK, Yuliana D, Erdenebaatar P, Kishi Y, Boldbaatar J, Suzuki R, Odongoo R, Davaakhuu G, Hohjoh H, Yoshioka K 2021. c-Jun NH₂-terminal kinase (JNK)/stress-activated protein kinase-associated protein 1 (JSAP1) attenuates curcumin-induced cell death differently from its family member, JNK-associated leucine zipper protein (JLP). *Drug Discovery and Therapeutics*. 2021;15(2):66-72.
- Suzuki R, Gunarta IK, Boldbaatar J, Erdenebaatar P, Odongoo R, Yoshioka K 2020. Functional role of c-Jun NH₂-terminal kinase-associated leucine zipper protein (JLP) in lysosome localization and autophagy. *Drug Discovery and Therapeutics* 14(1): 35-41.



【文化資源学部門】

足立 拓朗（あだちたくろう）

（所属：古代文明・文化資源学研究所 教授、専門：西アジア考古学）

<研究内容>

西アジアの新石器時代から鉄器時代にかけての遊牧民・移牧民を研究対象としており、以下の研究を進めている。新石器時代においては、移牧民の貝製品交易の研究を行っている。地中海産貝と紅海産貝の貝製品の分析から、貝製品の双方向の連鎖交換システムを明らかにすることが目的である。

銅石器時代においては、スプーン形土製品の研究を行っている。従来、村落遺跡から出土していたが、金沢大学が調査している砂漠地域の祭祀遺跡で出土しており、その新たな機能に注目して研究を進めている。先史時代におけるスプーンは、離乳食の摂取のために使用されたとする仮説を立てており、世界各地の先史時代のスプーン遺物との比較も行なっていきたいと考えている。

青銅器時代においては、武器研究を進めている。現在は特に槍の研究を進めているが、今後は棍棒の研究にも取り組んでいく予定である。アラビア半島の青銅製武器の編年を構築することが目的である。

鉄器時代においては、イラン系遊牧民の起源について研究を行なっている。これまで土器の型式学的研究を進めてきたが、今後は文化財科学の手法を取り入れた研究を実施していく計画である。

<主な著書・論文>

Adachi, T. and S. Fujii 2022. Chalcolithic Ceramic Spoons from Harrat al-Juhayra 1 and 2, Southern Jordan. *Studies in the History and Archaeology of Jordan* 14: pp. 135-143.

Adachi, T. 2019. A Chronological Division of the Iron Age III Period at the Tappe Jalaliye in Giran, Northern Iran. In S. Nakamura, T. Adachi and M. Abe (eds.), *Decades in Deserts: Essays on Near Eastern Archaeology in Honour of Sumio Fujii*, pp. 319-322. Tokyo, Rokuichi Syobou.

Adachi, T. and S. Fujii 2018. Shell Ornaments from the Bishri Cairn Fields: New Insights into the Middle Bronze Age Trade Network in Central Syria. *Proceedings of the 10th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East*, pp. 239-246. Wiesbaden Germany, Harrassowitz Verlag.

Adachi, T. and S. Fujii 2018. Wadi Hedaja 1 and 2: A Chronological Assessment Based on Unearthed Artifacts. *Al-Rāfidān* 39: 55-69.



サウジアラビア、タブーク州、
ワディ・シャルマ1遺跡、発掘中



サウジアラビア、タブーク州、
ワディ・グバイ遺跡群、踏査中



上田 長生（うえだ ひさお）

（所属：人間社会研究域人文学系 教授、専門：日本近世史）

＜研究内容＞

大学院以来の研究テーマは、江戸時代から明治期の社会と天皇との関係です。この課題に接近するために、幕末維新期に国家によって大きく改変された天皇陵を素材に研究を進めきました。近代化過程で新たな国家祭祀・イデオロギーが段階的に構築された政治史レベル、江戸時代には行方も分からなくなっていた天皇陵の所在地を考証する知識人レベル、天皇陵が所在する村・町での民衆の動きという社会レベルの3つの位相について、相互の関係や展開過程を解明してきました。

金沢大学に着任後は、加賀藩領（現在の石川県・富山県域の大半）の藩領社会の構造と支配のあり方を解明するために、中間支配機構である十村制の特質と展開を主たる対象に研究を進めています。石川県・富山県の史料保存機関や旧十村家に残る膨大な文書を網羅的かつ横断的に調査し、十村が集団的に郡村を支配する様相や、その近代への展開過程を検討しています。

また、2024年1月1日の能登半島地震の発生を受け、石川県内の日本史研究者・文化財担当者・学芸員の皆さんと「いしかわ歴史資料保全ネットワーク（いしかわ史料ネット）」を結成し、国の文化財防災センターが進めている文化財レスキュー事業に参加してきました。そこでレスキューされた古文書の整理・調査を、いしかわ史料ネットの会員や学生・大学院生の皆さんと進めています。能登の豊かな歴史・文化の発信を進めつつ、被災資料の保全・活用に取り組んでいきたいと思います。

＜主な著書・論文＞

上田長生 2025 「19世紀の藩領社会・中間層と藩権力—加賀藩の地域的入用と備荒貯蓄—」歴史学研究会編『歴史学研究』1067。

上田長生 2025 「「真陵」のゆくえ—近代日本の陵墓治定をめぐる相克—」歴史学研究会編『歴史学研究』1062、124-130頁。

上田長生 2024 「能登半島地震といしかわ史料ネットの活動」日本史研究会編『日本史研究』746、124-130頁。

上田長生 2022 「魚肥と藩領社会」武井弘一編『イワシとニシンの江戸時代』吉川弘文館、71-101頁。

上田長生 2020 「加賀藩十村の身分意識」加賀藩研究ネットワーク編『加賀藩研究』10、24-40頁。

上田長生 2020 「加賀藩十村制の確立過程と相談所」日本史研究会編『日本史研究』694、30-59頁。

上田長生 2012 『幕末維新期の陵墓と社会』、思文閣出版



能登町の旧家での被災資料レスキュー



レスキューされた古文書の整理作業



川澄 厚志 (かわすみ あつし)

(所属 : 融合研究域・融合科学系 准教授、専門 : 都市計画・建築計画)

<研究内容>

2001年よりアジアの都市貧困コミュニティを対象に、小規模住民組織を単位とした「コミュニティ開発」の手法構築に取り組んでいます。近年はこの研究テーマに加え、人口減少社会における持続可能な観光地域づくりと新しい暮らし方の共創をテーマとしています。リモートワークや二拠点居住への関心により、都市から地方への移住や「関係人口」の拡大など、暮らし方が多様化しています。一方で、都市政策ではコンパクトシティ化の議論も進んでおり、分散と集約という二つの潮流が同時に存在しています。こうした変化の中で、地域社会がどのように持続可能性と包摂性を両立させるかを探求しています。特に、弱い紐帯による社会関係資本の再構築に注目し、地域外の人々との緩やかなつながりが地域の創造性やレジリエンスを高める可能性を検証しています。さらに、地球環境の変化や人口減少などの社会構造の変化に対応するため、地域学の再構築にも取り組んでいます。文理融合の視点から、レジリエンス評価、新たな暮らし方を通じて、次世代に向けた地域デザインと持続的な地域社会の実現を目指しています。

<主な著書・論文>

MAIMAITINYAZI Mamuti and KAWASUMI Astushi 2025. A Comparative study on the Japanese and foreign tourists' Satisfaction with visiting the Higashi Chaya district in Kanazawa city—An Analysis Based on Online Reviews Data—. *Leisure and Tourism Studies* No.12:45-56.

川澄厚志・敷田麻実 2024 「媒介システムの拡大と「管理される移動」－労働の観光化の進行と管理されるノマドワーカー－」『観光学術学会第13回大会発表要旨集』、38-39頁。

川澄厚志・中谷陽・丸谷耕太・森崎裕磨 2024 「令和6年能登半島地震における観光資源の被害状況に関する基礎調査－能登6市町における悉皆調査の結果より－」『第39回日本観光研究学会全国大会学術論文集』、216-220頁。

清水一樹・川澄厚志 2024 「スローツーリズムの特性を活かした関係人口の構築に関する研究－石川県鹿島郡中能登町への移住者を対象とした半構造化インタビュー調査より－」『観光研究』特集号、36-45頁。

川澄厚志 2024 「世界農業遺産認定後におけるふるさと学習を通した関係人口構築の可能性-2023年度いしかわ里山塾の事例より-」『地域活性化研究所報』21号、25-30頁。

古山周太郎・川澄厚志 2023 「インドネシアにおける地域防災ボランティア組織の活動とメンバーの意識に関する研究～日本赤十字社とインドネシア赤十字社による地域防災プロジェクトを事例として～」『都市計画論文集』Vol.58 No.3、1376-1383頁。

川澄厚志・藤井敏信 2012 「コミュニティ開発における小規模住民組織を単位とした開発手法の有効性に関する比較研究 - タイ・ソンクラー県・ガオセン地区の事例を主に - 」『都市計画論文集』Vol.47 No.3、1051-1056頁。



豊島 祐樹（とよしま ゆうき）

(所属：融合研究域・融合科学系 講師、専門：環境デザイン、都市計画・建築計画)

<研究内容>

能登地域や金沢を主なフィールドとして、歴史的建築物や地域の記憶など広く地域の資源を「文化資源」と捉え、建築、地域・都市計画、ランドスケープデザイン、コミュニティデザインなど、分野横断的な研究や実践を行っています。

研究対象の1つの歴史的建築物は、文化財指定された価値がすでに認められた建物だけでなく、地域に広く分布している未指定の建物も研究対象としています。まち全体の中で文化財指定された建物はごく一部であり、地域の風景を形づくっているのは未指定の建物のため、これらの建物をいかに再生・活用するかに取り組んでいます。今後は、地域に残る建物の適正評価手法の構築を進めていきます。

地域での実践として、能登半島地震の復興に取り組んでいます。宇出津コミュニティラボは、明治45年の民家を地域のコミュニティ拠点として整備し、ワークショップや展示をはじめとする各種イベントの企画・運営を行っています。記憶の街ワークショップは、震災前のまちの状態を白模型でつくり、住民ワークショップで色を塗ったり思い出を語ってもらい、住民の記憶を可視化し未来へ繋いでいく試みです。

<主な著書・論文>

豊島祐樹・寺山一輝 2024 「空き家バンクデータを用いた歴史的建築物の改修・活用の実態分析－金沢市を事例として」『都市計画論文集』Vol.59 No.3、988-995頁。

Yuki Toyoshima, Mitsuhiro Kawakami, Zhenjiang Shen 2024. The Current Factors Impeding the Preservation and Utilization of Historical Buildings in Japan. *International Review for Spatial Planning and Sustainable Development* 12(4):117-131.

豊島祐樹・川上光彦・関口達也・沈振江 2021 「金沢市における歴史的建築物の空き家の流通・再利用の実態と課題」『日本建築学会技術報告集』27(66)、908-913頁。

豊島祐樹・川上光彦 2019 「金沢市における歴史的建築物の改修補助事業の実態と課題」『日本建築学会計画系論文集』84巻・第766号、2605-2615頁。



宇出津コミュニティラボ展示風景(石川県能登町)



記憶の街ワークショップin能登町小木・九十九湾



外部研究資金採択情報 (2025年9月1日現在)

科学研究費補助金 (研究代表者になっている資金のみ)

基盤研究(A)

- 古畑 徹 高句麗・渤海史像の再構築についての総合的研究
覺張 隆史 遺跡出土古人骨の核DNA保存領域に関する包括的研究
佐々木 由香 新たな「見える化」技術による縄文時代の植物資源利用研究の解明
足立 拓朗 西アジアの古代文明における薬草利用の解明：土器付着炭化物からの薬効成分の検出

基盤研究(B)

- 中村 慎一 朱の利用から解き明かす中国文明の形成過程
小高 敬寛 「肥沃な三日月地帯」東翼における新石器化から都市化への移行過程
上田 長生 近世日本の災害・復興の総合的研究—能登国における通時的・網羅的把握を目指して—

基盤研究(C)

- 松永 篤知 「編む」から「織る」へ—東アジア先史時代における編織技術革新の研究—

若手研究

- 石谷 孔司 メタゲノムを利用した試料属性推定システムの構築
豊島 祐樹 歴史的建築物の再生と活用のための不動産流通マニュアルの開発

学術変革領域研究(A)-公募研究

- 石谷 孔司 生物考古情報の復元に向けたパレオメタゲノミクス技術の開発
佐々木 由香 植物資源利用から見た4.2kaイベントに対する日本列島の縄文人の適応



その他の研究資金・委託事業資金（研究代表者になっている資金のみ）

日本学術振興会 研究拠点形成事業B-アジア・アフリカ学術基盤形成型

足立 拓朗 学際融合と文化資源学による陸海シルクロード研究拠点の形成

文化庁 Innovate MUSEUM 事業 - 地域課題対応支援事業

足立 拓朗 VR技術を用いた能登半島の文化資源の発信による観光復興支援

渋谷学術文化スポーツ振興財団 文化活動に対する助成金

上田 長生 古文書の調査・研究

令和7年度地方創生推進交付金事業 中能登町×金沢大学共同研究連携事業

川澄 厚志 中能登町観光学調査プロジェクト

石川県里山振興室 令和7年度 大学生と小学生による協同学習事業（金沢大学）

川澄 厚志 令和7年度のとがたり影絵（和倉小学校）

(公財)いしかわ女性基金 令和7年度いしかわ女性基金調査研究事業

川澄 厚志 防災・災害復興分野への女性の社会参画促進要因に関する実証的研究
—令和6年能登半島地震におけるクリティカル・マス理論の効果測定—

科学研究費補助金（研究機関を「金沢大学」として申請した客員教員・研究員の案件のみ）

基盤研究(A)

久米 正吾 原シルクロードの形成－中央アジア山岳地帯の初期開発史に関する総合研究－
小林 正史 コメの日本史の再構築：和食文化の成立過程の解明

基盤研究(B)

菊地 大樹 中国周代における農牧接触地帯の馬政史

国際共同研究加速基金 国際共同研究強化(B)

北川 千織 日・独・エ共同研究：古代埃及、グレコローマ時代の宗教と動物－中部埃及の事例研究

若手研究

深山 絵実梨 金属器時代フィリピン中部の葬制の特質と南シナ海域ネットワークにおける位置付け



金沢大学古代文明・文化資源学研究所規程

(趣 旨)

第1条 この規程は、金沢大学学則第10条の2第2項規定に基づき、金沢大学古代文明・文化資源学研究所（以下「研究所」という。）に関し、必要な事項を定める。

(目 的)

第2条 研究所は、金沢大学の強みである考古学・文化資源学の分野に革新的なパレオゲノミクスを融合させて格段の進化を図り、新しい古代文明研究スタイルをもつ世界トップレベルの研究拠点を形成することを目的とする。

(部 門)

第3条 研究所に、次に掲げる部門を置く。

- (1) 考古学部門
- (2) 考古科学部門
- (3) 文化資源学部門

(職 員)

第4条 研究所に、次の職員を置く。

- (1) 研究所長
 - (2) 副研究所長
 - (3) 研究所教員（学内兼任教員及び特任教員を含む。）
 - (4) 研究員
- 2 前項の職員のほか、必要に応じ、その他の職員を置くことができる。

(客員教授等)

第5条 研究所に、客員教授及び客員准教授を置くことができる。

(研究所協力教員)

第6条 研究所に、必要に応じ、他の部局の教員を研究所協力教員として置くことができる。

2 研究所協力教員は、研究所の運営及び研究等に協力するものとする。

(研究所長)

第7条 研究所長は、研究所の管理及び運営を総括する。

2 研究所長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
3 研究所長が欠けたときの補欠の研究所長の任期は、前任者の残任期間とする。
4 研究所長の選考については、別に定める。

(副研究所長)

第8条 副研究所長は、研究所長の職務を補佐する。

2 副研究所長は、研究所教員のうちから研究所長が指名する。ただし、その任期は、指名した研究所長の任期を超えないものとする。

(研究所教員の選考)

第9条 研究所教員の選考については、別に定める。

(研究所会議)

第10条 研究所に、金沢大学古代文明・文化資源学研究所会議（以下「研究所会議」という。）を置く。

2 研究所会議は、次に掲げる事項を審議する。

- (1) 研究所の運営に関する事項
- (2) 研究所の中期目標及び中期計画の策定並びに中期目標に係る事業報告書の作成に関する事項
- (3) 研究所長の候補者の選考に関する事項
- (4) 研究所教員及び研究所協力教員の選考に関する事項
- (5) 研究所の予算及び概算要求に関する事項
- (6) その他研究所の教育又は研究に関する重要事項

(研究所会議の組織)

第11条 研究所会議は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 研究所長
 - (2) 副研究所長
 - (3) 研究所教員
 - (4) その他研究所会議が必要と認めた者
- 2 前条第2項第3号及び第4号の事項を審議する場合は、前項に定める者のうち教授の職にある者に限るものとする。

(研究所会議の議長)

第12条 研究所会議に議長を置き、研究所長をもって充てる。

2 議長は、研究所会議を主宰する。

3 議長に事故があるときは、議長があらかじめ指名した委員が、その職務を行う。

(会 議)

第13条 研究所会議は、委員の過半数が出席しなければ会議を開き、議決することができない。

2 議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。ただし、特別の必要があると認められるときは、3分



の2以上の多数をもって議決することができる。

(委員以外の者の出席)

第14条 研究所会議は、必要があると認めたときは、委員以外の者の出席を求め、意見を聞くことができる。

(事務)

第15条 研究所の事務は、関係部署の協力を得て、人間社会系事務部において処理する。

(雜 則)

第16条 この規程に定めるもののほか、研究所に関する必要な事項は、研究所長が別に定める。

附 則

- 1 この規程は、令和4年4月1日から施行する。
- 2 初代研究所長の任期は、第7条第2項の規定にかかるわらず、令和5年3月31日までとし、再任を妨げない。



イラク・クルディスタン、
シャカル・テペ遺跡の発掘調査（2023年）



イラク・クルディスタン、
シャイフ・マリフ遺跡の発掘調査（2022年）



〒920-1192 Kakuma-machi, Kanazawa
Kanazawa University
Institute for the Study of Ancient Civilizations and Cultural Resources

〒920-1192 金沢市角間町
金沢大学
古代文明・文化資源学研究所
<https://isac.w3.kanazawa-u.ac.jp/index.html>
© Institute for the Study of Ancient Civilizations and Cultural Resources

表紙・裏表紙写真：サウジアラビア、タブーク州、アル・ウヤイナ遺跡の調査（2025年、足立拓朗撮影）

